

# 鈴廣の新社屋 自然エネルギーを有効活用した

創業百五十年を迎える、エネルギーの地産地消を目指した鈴廣蒲鉾本社の新社屋が、この度完成しました。設計段階から「賢いエネルギーの使い方とは」という視点を持ち、「省エネルギー」と「創エネルギー」を実現した社屋をご紹介いたします。

## 環境への負担を低減する

### ZEBの実現を目指して

今年八月、小田原市風祭にある「かまぼこの里」敷地内に、鈴廣蒲鉾本社の新社屋が完成しました。この建物は、経済産業省が提案する「ゼロ・エネルギービル（以降ZEB）」実証事業に選ばれ、採択されたものです。

「ZEB」とは、建物内における一次エネルギー消費量を、建築物・設備の省エネ性能向上、エネルギーの面的利用、再生可能エネルギーの活用などによって削減し、年間での一次エネルギー消費量が、正味でゼロを達成するものです。

## ふるさとづくりへの 願いを込めて

鈴廣の企業理念に「食する」とは、命をいただき、命をうつしかえること。その一翼を担うのが私たちの仕事」という言葉があります。一本のかまぼこをつくるためには数尾の魚が



\*一次エネルギー…自然から採取されたままのエネルギー。石炭や石油、天然ガスなどの枯渇の恐れがあるエネルギーと、水力、太陽・地熱など自然から直接得られる再生可能なエネルギーのことです。これに対して二次エネルギーは、電気、都市ガス、ガソリンなど一次エネルギーを変換、加工して得られるエネルギーのことです。

\*\*エネルギーの面的利用…複数の建物や地域間などでエネルギーを効率的に共同利用すること。

必要で、その魚のいのちをお客様のいのちにうつしかえるお手伝いを、私たちはしているといふ意味です。人間の体は、自ら選び食べる物からつくられます。

つまり食べ物＝自分のからだであり、豊かな食材をもたらしてくれる自然と人間は大きな環にあることがわかります。ふるさとも、人間の都合で汚すのではなく、より良くして、次世代に受け渡していかねばなりません。

鈴廣では、そのような考え方のもと、具体的な取り組みを進めています。かまぼこをつくる際

に出る魚のアラからつくった魚肥を農家さんに使っていただき、その土で育てた野菜や果物を鈴廣のレストランや製品に使用したり、電気自動車を営業車に取り入れたりと、地球の資源を大切にする取り組みを行っています。さらに、東日本大震災と原発の事故発生後の節電を機に、直しを本格化、省エネについての研究、そしてエネルギーを生み出す「創エネルギー」の研究にも着手。太陽光発電、また地中熱と地下水利用の空調システムを導入しました。

た。よって、新社屋の建築に際しては、これまでの省エネ、創エネの実績を、さらに進めることを目指しました。

地下水を持つ小田原の風土の特性を活かした、鈴廣ならではの自然エネルギー活用といえるでしょう。

小田原の地下水熱

は年間を通じて一六〇一七〇℃と安定してお

り、夏暑く、冬寒い外気を一定

温度の地下水の利用で、夏は涼しく冬は暖かい气温を得ることができます。小田原は暖かい气温を得ることができます。鈴廣のバ

イキングレストラン「えれんな

ごつそ」で導入したこのシステムを、新社屋にも反映させました。また、水熱源は、エアコン機能のほかに、外気処理機能に利用ができ、空気をクリーンにして冬は加湿、夏は除湿調節をする「調湿」作用により、建物全体を「陽圧」に保つことを可能にしました。陽圧とは、外気よりも気圧を上げることにより、ほこりや花粉、雑菌を含む外気の侵入を防ぐ状態をいいいます。よって体感的には、やさしい涼しさ、やさしい暖かさという表現がふさわしい、心地よさが得られました。

新社屋に足を踏み入れてまづ感じられるのは、自然光を取り入れた明るさと、木のぬくもりです。フローリングや天井のルーバー、事務机には、小田原産のヒノキを使用しました。このヒノキは、戦後に植樹され、切り入れた明るさと、木のぬくもりです。フローリングや天井のルーバー、事務机には、小田原産のヒノキを使用しました。このヒ

ノキは、戦後に植樹され、切り

入れた明るさと、木のぬくもり

です。フローリングや天井のルーバー、事務机には、小田原産のヒノキを使用しました。このヒ

ノキは、戦後に植樹され、切り

入れた明るさと、木のぬくもり

です。フローリングや天井のルーバー、事務机には、小田原産のヒノキを使用しました。このヒ